

ラホヤ村通信

(1)

高垣愉佳

1. はじめに

ある朝、パソコンを開けると「対人援助学マガジンでアメリカ生活の連載してみませんか？」という旨のありがたいお誘いのメールが届いていた。渡米する前には、渡米したら何か発信をしたいと思っていたこともあったが、そんな熱い思いはとっくの昔に忘れて友達同士の SNS で近況報告することで満足していた。

対人援助学マガジンは何度か読んだことがあり存在は知っていたけれど、対人援助マガジンで連載させていただくのは無理だろうと思っていた。アメリカ生活の連載が許されるような本だったかな？と思いながら、改めて対人援助学マガジンを読んでみた。かつて対人援助関連の仕事に関わっていた私は、読み始めると“どういう類の本だったかを確認する”という当初の目的をすっかり忘れて引き込まれてしまった。はたと我に返って、やはり、アメリカ生活のような連載をしている筆者は居ないということに気付いた。筆者の方々はそれぞれに対人援助の分野にフィールドを持ち、実践と研究を続けていらっしゃる方々ばかりだった。一方私はと言うと、アメリカでぶらぶらしているただの主婦なのだった。

それでも書いてみようと思ったのは、対人援助学会のトップページにある、ごあいさつの中の一文中に感じる場所があったからだ。『この対人援助学は、対象となる個人の現在の問題について、多様な環境のなかでその環境と相互に関係し、相互作用を通して生活を送る生活者の課題であることを前提に作業を進める必要があります。』これを読んで私は、そうか！アメリカという環境で相互作用を通して生活を送る生活者の課題を書けば良いのだと思った。課題までは私には書けないかもしれないが、とにかく私が見た事や聞いた事を書いてみようと思った。課題は私一人で考えなくても、読んで下さった方々と共に考えて行けばよい。私一人で考えるよりもその方がずっと良いに決まっている。このように考えて、私は連載を書かせていただく事を決めた。ひとまずは、“ちょっと風変わりなアメリカ滞在記” 辺りを目指して書き始めたいと思う。

2. ラホヤ村について

私が居るのは、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴ郡ラホヤ市ラホヤ村通り。

カリフォルニア州は、アメリカの南西に位置する縦に細長い州だ。有名なものとしてはサンフランシスコ、ロサンゼルス、シリコンバレー、デスバレー、ヨセミテ国立公園などがある。というよりは、カリフォルニアに関して、日本に居る時に私が持っていた知識はこの程度のものだった。

イメージとしては、昔見たカリフォルニアを舞台にしたアメリカ TV ドラマ『ビバリーヒルズ青春白書』や『The・OC』のイメージしか無かった。後に知ったのだが、トム・クルーズが主演して大ヒットした『トップガン』の舞台になったのがサンディエゴだった。この程度の知識で、サンディエゴに関しては全く知らなかったし、ラホヤ市に関しては言わずもがなで、「何それ？あほや市」などと言って笑われていた。

しかし、サンディエゴは数字の上で見ると実はけっこうな大都市だった。人口はサンフランシスコよりも多く、アメリカ第 8 の大都市。ワシントン D・C やボストンよりも規模が大きい。

サンディエゴの位置は、カリフォルニア州の最南端にあり、車で 40 分も走るとメキシコとの国境に入る。メキシコとは国道で繋がっており、国道には検問なども無いので、ぼんやり走っていると気づいたらそこはメキシコだったというような事が起こり得る。また国境には高さ 3 メートルくらいのフェンスが張り巡らされているだけで、ハーレーに乗った国境警備隊がちらほら巡回しているものの、国境から 20 メートルくらいの所には両国共に建物が立ち並んでいるので、フェンスを越えるのはそう難しくないなそうだなと思った。実際に国境を越え

て来る人達は多いらしく、それが治安の悪化に繋がったり、移民の増加による政府の財政圧迫に繋がっているようで問題だということがニュースになっている。

一方で、メキシコと国境を接しているということが、サンディエゴの発展に寄与している部分もある。サンディエゴには世界中から集まった医者や化学者、薬学者、生物学者らが暮らしている。そしてまた、製薬会社で働く人達もたくさん居る。どうしてこういう人達が集まるのかというと、新薬を科学技術の進んだアメリカで研究開発して、人件費の安いメキシコで生産するからなのだそう。つまり、サンディエゴはアメリカの医療ビジネスを担う街なのだ聞いた。

サンディエゴのもう一つの特徴としては、基地の街だということが挙げられる。映画『トップガン』の舞台となったミラマー空軍基地は今も健在のようで、朝となく夜となく戦闘機が轟音を立て、宇宙人でも攻めて来たかと思うほど大急ぎで頭の上を飛んで行く。そして港には、ヨットと並んで空母や護衛艦などが所狭しと並んでいる。第二次大戦で使用された空母ミッドウェーもサンディエゴの港にあって、今は博物館として使用されている。

ある時バスの中からぼんやりと港を見ていたら、黒くてつるんとした物体が海から出てくるのを見た。「あ！クジラや！クジラ、あそこ見て！」と言った私は次の瞬間呆然とした。それはクジラではなく、何と潜水艦だったのだ。というわけで、運がいいのか悪いのか分からないが、潜水艦に会えるくらいに軍事と密接に関わっている街なのだ。そして当然ながら軍と関わる人達がた

くさん暮らしている。

やっとラホヤ市の説明にたどり着いた。街の説明はこれで最後なので、もうしばらくおつきあいいただきたい。ラホヤ市はサンディエゴの北に位置する。サンディエゴのダウンタウンから車で 30 分程の所だ。ラホヤというのはスペイン語で、昔入植したスペイン人がこの辺りのビーチを見て「宝石のように美しい」と言ったことから、今でもスペイン語の「ラホヤ (宝石)」が地名として使われている。

ラホヤにあるものと言えばカリフォルニア大学とビーチ位のものだ。大都市であるサンディエゴ市のすぐ真北に位置し、交通至便、温暖な気候に美しいビーチを持つラホヤは、リタイアしたお年寄りに大人気だ。毎年全米で行われるリタイア後に暮らしたい街アンケートで上位に上がってくる街になっている。そんなわけでラホヤ市の住人は、学生とお年寄りが多い。

2 年ほど前から成田発 JAL の直行便が開通し、大手旅行会社がサンディエゴ&ラホヤのパックツアーを組み始めたそう。大都市に隣接して美しいビーチを持つこの街は、リゾート地としても有名で、アメリカ中から旅行者が訪れる場所でもある。

これらのことは私がこの街に溶け込むことに一役買ってくれたくれたのではないかと思っている。なぜなら、私が生まれ育った京都という街もそういう街だからだ。

3. ビザの申請

まず、何より大切なことは期日までにビザの申請書類を作成することだった。当た

り前なのかもしれないが、書類は全て英語だった。しかも目を通さなければいけない書類も含めると、その量は厚さにして 1 センチ近くあった。あんなにたくさんの英文を必死で読んだのは、後にも先にも初めてだった。後になって、専門の弁護士さんなどに頼めば代行してくれるサービスがあるらしいということを知った。

しかし、自分で書類を読んで手続きをしたことは、アメリカを知る上で大変良い勉強になったように思う。書類作成では様々な質問に答えなければならなかった。英語が大の苦手の私は、読み違えを防ぐ為に質問事項を指でなぞりながら声に出して読み上げつつ作成した。不用意に回答してしまっただけではいけないので、知らない単語は全て辞書を引いた。YES・NO で答える質問がほとんどだった。

質問自体は読み終わると、そんなわけないやろー！と吉本新喜劇風に突っ込みを入れてしまいたくなるような内容が多かった。英文を読んで書類を作成するという拷問にも近い作業のストレスを発散するかのようには、私は「そんなわけないやろー！No!」と声を出しながら回答を続けた。

そんなわけないやろー！と突っ込みを入れた質問の例としては、このようなものがあつた。『あなたは公務員として一人っ子政策を行ったことがありますか？』この質問は明らかに中国の共産党を意識して作られた項目だと思われる。この質問がある限り、中国共産党の党員にはビザは下りないだろう。

一方でウームと考え込んでしまう質問もあつた。『あなたは、アムネスティー・インターナショナルやグリーンピースでの活動

を含む、政治的活動を行っていますか?』私は政治団体などには所属していないし、特にこれといって支持している政党があるわけでもない。しかし、アムネスティ・インターナショナルの署名に協力したことはあるし、人権問題にも環境問題にも関心はある。ところで、アムネスティ・インターナショナルやグリーンピースは政治団体と言えるのか?という疑問が湧いた。この作業を通して、アメリカがどういう人達を入国させたくないと考えているのか、ということについて垣間見た気がした。

4. ビザ面接

申請書類を送ってしばらくすると、アメリカ領事館から面接の日時を知らせる連絡が来た。領事との面接は英語で、万が一申請書類と違う回答をしたり、領事の心証を害するようなことがあれば、ビザは下りないと聞いていた。そして、一度ビザの発給を拒否されると記録に残り、二度とビザが発給されることはないとも聞いていた。インターネットで、ビザ面接をした人のサイトから情報を集め、念入りに準備をした。

念を入れ過ぎて、面接の 1 時間も前に領事館に着いてしまった。領事館の前には、鉄格子の付いた警察官が乗るバスのような車が数台、正面を囲むようにして停まっていた。恐らくテロか何かが起こった時の対応を想定しているのだろう。そして玄関前には警察官が数人警備をしていた。こんなにもものものしい所に来たのは初めてだった。入り口に入る前に今すぐ引き返して帰りたい気持ちになった。

とは言え、帰るわけにも行かないので、

仕方なく観念して階段を上り中へ入った。飛行機に乗る時と同様に、入り口に入る前に、荷物から何から全てチェックされた。つい先ほどの今すぐ引き返したい気持ちに代わって、とにかく言われるとおりに従うしかないという、無力感にも似た感覚が湧いてきた。

初めに事務員さんの居る窓口と呼ばれて、書類等に不備が無いかどうかをチェックされる。ここで不備が見つかったら、そのまま面接を受けずに帰されることになる。実際に帰されている人を 2 人ほど見た。指紋と虹彩を撮られて、事務員さんの窓口をクリアすると次のステージに進める。領事さんの居る部屋に一步一步向かいながら、アドベンチャーゲームの主人公がステージクリアして次のステージに進むのはこんな気持ちなのだろうか?などと考えた。

私の勝手なイメージによると、領事さんという人は大きな木のテーブルの向こうで、背の高い革で出来た椅子に深く腰かけている、少し太った中年のおじさんのイメージだった。ところが、実際の領事さんは、先ほどの事務員さんと同じプラスチックの窓口の向こうで、簡素な事務椅子に腰かけていた。しかも、風貌も少し太った中年のおじさんではなく、皆スマートだった。

領事さんは 1 人ではなく数人居て、一つの窓口に一人ずつ座っていた。その窓口の前に申請者は一列に並んで待つ。別に見たくないし聞きたくもないのだが、各窓口で交わされる会話が聞こえて来るし、その様子も目を閉じない限り見えてしまうような広さの部屋だった。

なぜ見たくも無いし聞きたくも無かったかと言うと、恐ろしいことに、発給を断ら

れている人が何人も居たからだ。面接を待つ身としては、これほど心臓に悪いことは無かった。

一番胸に響いて印象に残っているのは、アメリカに留学している奥さんに会う為にビザの申請をした男性だ。黒っぽいクルートスーツのような服装の男性だった。学生結婚のようで、その男性も大学院生らしかった。領事さんはプラスチックの受付ボックスの中に居るので、領事さんの言っていることの詳細は聞き取れなかったが、男性の声から発給拒否されたいことが分かる。「どうしてだめなんですか？妻は I 大学の大学院生で、僕は R 大学の博士課程の学生で、僕たちは結婚もしています。」と訴えている。それでもその男性が納得いかないことを言われた上に断られたらしく、「怪しい者ではありません！」という声が聞こえてきた。そして最後に男性が叫ぶようにして言った、「お願いします。妻に会わせてください！」という声が忘れられない。

他にも日本人女性と在日外国人らしき女性が発給を拒否されている様子を見てしまった。発給拒否されるのには、きっとそれ相応の理由があるには違いない。しかし、そんな様子を眺めながら、第二次大戦中にリトアニア脱出を望むユダヤ人に対して、杉原千畝領事が発給した『命のビザ』の事がふと思い出された。杉原千畝さんの前に詰めかけたユダヤ人の人たちも、こんな風に大きな声でお願いをしたに違いないだろうと思った。時代は変わっても、一つのビザ申請に一つの想いが込められている事に変わりはないのかもしれない。

次の日から寝込むのではないかと言うほどドキドキしながら迎えた私自身の面接は

と言うと、何と何の質問も無しにあっさりと許可が下りた。しかも領事さんは書類に許可のハンコを押しながら、「サンディエゴはすごくいい所だよ。サンディエゴライフを楽しんでね♪」などと言いながらニコニコ笑っていた。先ほど目の前で見たものは何だったのか？何が何なのかさっぱり分からなかった。

5. CRIME MAP

ビザの次は、アメリカに行く前に住むところを探さなければならなかった。アメリカに住んだことのある人達に話を聞くと、住むエリアに気をつけなければいけないということだった。道一本隔てると全く雰囲気が変わって危険な地域があったりするということがあった。

というようなアドバイスはもらったものの、名前すら知らない街のエリア情報をどうやって知ればいいのかというのだろうか？と困った。しかし、少し調べてみるとインターネットで、ほぼリアルタイムの犯罪状況を公開している CRIME MAP というものがあることを知った。

早速、1週間ほどそのサイトで街の状況をチェックしてみた。サンディエゴは比較的治安のいい所だと聞いていたのに、いつサイトを開いても地図上は強盗やら窃盗やら暴力事件やらの表示で埋め尽くされていて、頭がクラクラした。

それでも、ここで多くのアメリカ人が暮らしているのだから、私に暮らせないはずは無いのだと自分に言い聞かせた。CRIME MAP の情報を信じて、一番安全そうなエリアのコンドミニウム(*)を契約した。

6. 賃貸契約

不動産屋さんのホワイトリストを入手した。CRIME MAP を参考に選んだエリアを指定して、インターネットで住む所を探した。不動産屋さんとはメールでのやり取りのみだった。インターネットとメールだけのやり取りで、住む所を借りる方も借りる方だが、貸す方も貸す方だと思った。もしお互いがとんでもない悪人で、お金をだまし取られたり犯罪に巻き込まれたりしたらどうするのだろう。

不動産屋さんに物件を紹介してもらうにあたっては、かなり詳細な履歴書のようなものを送らなければならなかった。カラー写真付きで、学歴や職歴、趣味などなど、人となり分かる資料を送る。それを見た不動産屋さんが、この人になら紹介しても良いかなと思ったなら紹介してくれるというシステムだった。

実は初め、私は不動産屋さんを胡散臭く思っていた。というのも、彼女が不動産屋さんであると同時に保健衛生学の教授でもあったからだ。大学院でお世話になった先生方のことを思い浮かべてみた。どの先生方も、教育や研究や本の執筆や講演などに忙しく、とてもじゃないが大学教授が不動産屋との二足のわらじを履くのは不可能なことのよう思えた。しかし、一方で、嘘にしてはあまりにもレアなストーリーだとも思った。嘘をつく人は、誰にでも理解しやすいストーリーを作って嘘をつく事が多いのではないかという気がした。“嘘のようなホントの話”とはよく言ったもので、嘘のような話には本当の話が多かったりする。

万が一騙された場合、契約金が無駄にな

り、また一から住む所を探さなくてはならなくなる。それは確かに困る。しかし、逆の考え方をしてみた。最悪の場合でも契約金のことは勉強代だと思って忘れて、一から住む所を探せば済むだけの事だ。命を奪われるわけではない。彼女が信じられそうな人だと感じた自分の直感を信じることにして契約を結んだ。

結果的に私の直感は正しかった。彼女は本当に不動産屋であり、かつ大学教授でもあった。しかも、彼女は彼女の専門と似ている私の経歴書に興味と親近感を持ち、不動産を紹介することに決めたらしかった。そして、賃貸契約後も不動産屋さんとしての範囲を超えて、公私共に私を支えてくれる大切な人となった。

7. 出発

何とか準備を整えて、出発した。

関西国際空港からサンフランシスコまで約 10 時間のフライト。サンフランシスコで入国審査を受け、トランジットすればサンディエゴまでは空路で約 1 時間半。明日には、もうアメリカだ。



*コンドミニアム：別々の個人や会社が各物件を取得して、管理、販売または貸し出している集合住宅のこと。日本の分譲マンションに近いもの。一人の個人もしくは一つの会社が建物全体を管理、販売、貸し出している集合住宅はアパートメントと呼ばれる。